
犬鬼人随想録 ～蒼き牡丹外伝～

皆麻 兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬鬼人随想録 蒼き牡丹外伝

【Nコード】

N9061X

【作者名】

皆麻 兎

【あらすじ】

「里見八犬伝」の主役とも言える八人の犬士達。

彼らは、一人の少女との出会いで、それぞれの旅に多くの可能性を持ち始める事となる。その名は三木狭子^{みききょうこ}。500年以上先の未来から来たという彼女は犬士達と旅をし、最終的には犬塚信乃と結ばれる事になる。一方で、犬士達に限らず、彼女の周囲に現れる人物にも何かしら影響を与える事となる。

これは、犬士を含むいろんな者達が、彼女とかかわった事を思い出し、それを記した記録であった――

これは、2011年6月に完結した『八犬伝異聞録 蒼き牡丹』の
外伝をまとめた作品です。

プロローグ（前書き）

はじめましての方もいるかもしれません。

作者の皆麻 兎と申します。

この度は、『犬鬼人随想録 蒼き牡丹外伝』にアクセス戴き、誠にありがとうございます。

当作品は、完結した『八犬伝異聞録 蒼き牡丹』の番外編を収録した作品となっています。

『蒼き牡丹』では主人公である現代の女子高生・三木狭子の視点で描かれてましたが、当作品は、同作品に登場した里見の八犬士や、それ以外の登場人物の視点で物語が進んでいきます。

視点は章ごとに変える予定ですので、宜しくお願い致します。

また、当作品は『蒼き牡丹』を犬士達の視点で一部描いたりなど、多少のネタバレがあります。

『蒼き牡丹』をこー読されていない方は、そちらの方を先に読まれてからこちらを開くのが良いかと思われます。

プロローグ

「現在^{いま}つて…何年？」

今でも思い出せる、その娘の第一声。

某^{いぬづかしのもりたか}——犬塚信乃成孝は、^{ここが}澁我におわす足利成氏公に

仕官するため、故郷・大塚村から旅を始めていた。

その娘と出逢ったのは、道中で通った^{まるつかやま}円塚山での山中。道端に倒れていた娘を初めて目にした時、ひどく驚いたのをよく覚えている。

「浜路^{てい}…?!」

異風の体^{てい}に尼のような髪。見た事のない装束を身に着けていたのに、も驚いたが、何より印象的だったのは…故郷に残してきた許嫁・^は浜路と顔がうり二つだという事実だった。

その後、その娘とは澁我へ着くまでの道中を共に旅して一旦別れる事となる。名は^{みぎやう}三木狭子といい、姓を持つからにはどこかの武家出身の姫かと思いきや…本人が申すには、500年以上先の世から来たという。

澁我までの道中は、あまりに目新しい出来事が多くてよくは考えていなかったが…この狭子との出会いが、己の生き様を大きく変える運命的な出会いになろうとは、当時は全く考えていなかった某であった

プロローグ（後書き）

いかがでしたか。

このプロローグでわかる通り、最初は犬士の一人・犬塚信乃の視点で物語を進めていきます。なので、第1章が彼の章と叫びたかんじ？ 今後の展開として考えているのは、犬飼現八編や犬江親兵衛。悪役だと暮田素藤辺りのを考えています。

それと、本当の意味で言える”番外編”として、『蒼き牡丹』のキーパソンであつた少年・染谷純一の物語も書きたいな〜とか考えています。

…それを実行に移せるのかはわかりませんが…

本業も忙しいので、こちらは少しずつ更新していこうかと思えます！さて、次回から第一章に当たる『犬塚信乃編』になると思いますので、よろしく願いします（^^）

第1話 “先の世から来た娘”と出会って（前書き）

この第1章では、八犬士の一人・犬塚信乃の視点で話を進めます。

第1話 ” 先の世から来た娘 ” と出会って

「まことに、あの女子は肝が座つておる…！」

某が部屋に入ると、小文吾が妹の沼蘭殿ぬいとそのような会話をしていた。

「おお…信乃！」

こちらに気が付いた彼は、屈託のない笑顔を見せる。

許我こがへたどり着いた某は成氏公に謁見をするが、あらぬ疑いにより追われる身となってしまう。芳流閣で死闘を繰り広げた男・犬飼見八いぬかいけんと共にその場から川に転落し、流れ着いた先は利根川付近にある町・行徳。そこで宿を営む犬田小文吾いぬたこぶんごと沼蘭の兄妹に助けられる。しかし、匿つてもらつてからまもない頃に、某は生死の境をさまよつていたのだが――

「何故、あの娘は某を救つてくれたのであろうか…？」

某は隣部屋の襖を見つめながら呟く。

「誰かを助けるのに理由がいるのか？」…だそうだ

「見八…？」

部屋の壁に寄りかかりながら、見八が一言呟く。

「わしが“破傷風にかかった貴様を何故、救おうとするのか”と問うたら、そのような答えが返ってきたのじゃ」

「…助ける…理由？」

「左様。おそらく…あの娘にとって、死にそんな命を救う事は、人の子として当たり前と考えてるのやもしれん」

「人助けが当たり前…」

その言葉は、普通であつて普通でない。

…戦のないという時代から参つたからなのか…。それとも…？
某は狭が申していた台詞の真意を考えていた。しかし、今思えば…
彼女の純粹でまっすぐな精神こころゆえの言葉だったのだと実感ができる

のである。

そしてこの会話から数時間が経過した後、狹が目を覚まし、某や現八——この時はまだ“見八^{けんはち}”と名乗ったおった若者。そして、小文吾や妹である沼蘭殿は、大法師^{ちゅだいほうし}と名乗るご出家から、己らが持つ宿命の話を聞くこととなる。この行徳へたどり着くまでの間、法師殿は狹と共に旅をしてきたという。また、狹となぜ行動を共にしていたかも語ってくれた。

「…では、拙者はこれにて」

「法師様！お気をつけて…！」

その翌日、行徳を出る前に我らは法師殿の出立を見送った。

ただし、某と見八は許我^{こが}での一件でお尋ね者となってしまうたので、法師殿の見送りは小文吾と狹がしていた。

「狹子殿を宜しく頼みます…か」

「？どうした、信乃？」

「…いや」

古那屋の入り口付近にいた某に、現八が声をかけてくる。

我ら3人は、法師殿から託されたという事もあり、狹子と行動を共にする事となる。今まで女子^{おなこ}を連れての旅をした事がなかったので、この先はどうなるかと考えていた。

浜路^{はまじ}…。息災であろうか…

それと同時に、故郷である大塚村に残してきた許婚・浜路の事を考えていた。おそらく、狹の顔があの子と瓜二つ故に思ったのかもしれない。

「ん…？」

気がつくと、現八が深刻そうな表情をしながら、周囲を見渡している。

「現八…どうしたの？」

見送りから戻ってきた狹が現八を見て、不意に声をかける。

「…お主か」

狭の存在に気がついた彼は、我に変えたような表情で口を開く。
「何やら、誰かに見張られているような気がしたのだが…。どうやら、気のせいのようなじゃな」

フツと横目を向いた現八だったが、すぐにいつもの表情に戻った。
「相変わらず、お主は仏頂面のままじゃのう！少しは信乃を見習うたらどうだ？」

「…余計なお世話だ」

何事もなかったような顔で話す小文吾の台詞に、少し不快だったのかそっぽを向いてしまう現八。

そんな彼らに複雑そうな笑顔を見せる狭。それでも、某にとっては一時の安らぎともいえる時間であった。しかし、この時に現八が感じ取っていた気配の正体を、この後の旅で知ることとなるのである
た

「あれは…！？」

この台詞を某が口にしたとき、視界に入ってきた光景に驚いていた己に義兄弟であり、4人目の犬士・犬川莊助義任を迎えるために大塚村付近へ我々は向かった。そこで彼が牢に繋がれた話を聞き、助け出すためにと数日をかけて情報収集を行っていた。その最中、拠点としていた場所で狭や現八が謎の輩に襲われる。

「信乃！あれは、狭子ではないか！！？」

この時、共に偵察へ行っていた小文吾が、ある方向を指す。

「……！！」

群青色の髪をした忍びと刃を交える現八を目の当たりにした某は、その少し離れた所に、白髪の男と共にいる人物——狭の後姿が目に入る。

我らのいた場所は彼らから少し離れていたため、何を話しているのかは聞こえない。しかし、彼女の後姿を見る限り、狭は白髪の男に右腕を掴まれているようであった。

「狭!!?」

すると、男は右手で狭の首筋に一撃を加えて気絶させてしまう。
右腕だけが吊り上げられている状態になってしまった彼女を、己の
右腕で抱えようとする白髪の男。

「…っ!!」

この事態を某と同時に、現八も気がついていたと思われる。

しかし、彼は別の敵と戦っているため、狭の所へはなかなかたどり
着けない。「このままでは狭が攫われる」と直感した某は、敵の元
へ走りながら、脇差・桐一文字を抜いた。

キィイーン

刀と刀の交わる音が山林中に響く。

その後、何とか狭が連れ去られる事なく、その場は収まった。

「狭…!どこも怪我はないか…!?」

敵が去った後、地面に座り込む狭の側に駆け寄る某や現八。

「“純一を知っている”…って…どういう…こと…?」

「狭…?」

当の彼女は、某達の声が聞こえていないらしく、よくわからぬ台詞
を呟きながら呆然としていた。

…よほど、怖い想いをしたのだな…

某は無意識の内に、狭の肩に右手を添えていた。その時、彼女の身
体が小刻みに震えていたのを感じたからである。

「…兎に角、移動するぞ。小文吾、有力な情報は得られたのだろう
な?」

「ん…?ああ!じゃあ、この場を移動してから、俺らが得た情報を
話す!」

状況を察したのか、刀を握る右腕を押さえていた現八が小文吾に声
をかけ、某達と狭はその場を後にする。

「…これから、永い語りとなるでしょう。それは、私が人の子では

ない：“鬼”という生き物だからです」

「！！？」

この台詞は、荒芽山あらめやまで出会った老女・音音殿おとねが申した台詞である。莊助を助けた後、次なる犬士・犬山道節忠与いぬやまどうせつただともを迎えるため、白井へと向かった。その道中で彼の仇討ち騒動に巻き込まれ、関東管領・扇谷定正の家臣達と刃を交える事になる。その後、単節ひとよと名乗るくの一の手引きで、音音殿と出会う事となる。

彼女は狭が“先の世から来た娘”である事を知っていたらしく、神霊と成られた伏姫様の事や、己らを含む“鬼”の存在について語ってくれた。

あの時、狭を連れ去ろうとしていた白髪の男…。あれが墓田権頭ひきたこんのかみ素藤もとふじというのか…

この時、そのような事を某は考えていた。また、それと同時に、何故に彼女を連れ去ろうとしていたのか…その真意がますますわからなくなってしまった。

この後、残る犬士を探すため、3つに別れて旅を再開する事になる某達。その内訳は、下野国に現八と狭子。そして某が向かう事に。次に武蔵国へは、莊助と小文吾。新たに仲間となった道節は独り、許我こがへと情報収集のために向かった。

この時は許婚を失った悲しみでそれどころではなかったが…これまでに以上の謎とその答えが、その先の旅で待ち受けていようとは、微塵も思っていなかったのであった――

第1話 ” 先の世から来た娘 ” と出会って（後書き）

いかがでしたか。

本編では第2章→3章の間をスピーディーにまとめたかんじです！
ちよいとまとめすぎたかなとも思いましたが、狹子が素藤らに襲われている所をずっと狹子以外での視点で描きたかったんで、ここを描けたのはよかったと思います。

同じ物語でも、視点を変えるとこんなにも違うんだと実感。笑

さて、物語の方ですが…

実は、話の中に出てきた信乃の脇差・桐一文字とは、実際に原作（『南総里見八犬伝』）でも彼が使用していた刀。ただ、この時はまだ名刀で有名な村雨丸を持っていなかったため、この脇差を使ったという次第になります。

さて、今回は本編では第4章辺りの所からスタートします。ここからだんだん深くなるであろうと思いますので、原作との違いを見せながら書いていきますんで、よろしく願います（^^）

今作品は外伝となりますので、作品としてはさびしいかと思いますが、宜しければご感想を戴ければ幸いです。

よろしく願います！

第2話 深まる謎と降りかかる危機（前書き）

ここで大角を”角太郎”と書いていたりもしますが、後者は大角の幼名みたいなもので、決してスペルミスとかではありません。
…念のため、お知らせします。

第2話 深まる謎と降りかかる危機

荒芽山での一日が終わり、我らは3つに分かれて犬土探しの旅を再開する。下野国へ向かう事となった現八・狭子・某の3人は、道中…上野国と下野国の国境にある集落・猿石村で一宿取る事と相成った。

村にたどり着く前に狭が妙な事を申ししていたが、その日の夜…泊めて戴いた村長の家にて、思いもよらぬ出来事が起こったのである。

「信乃様…」

「…!？」

風呂からあがったため、黒い髪が半濁き状態の狭。

そのいくらか艶っぽい彼女の口から、普段は口にしないような申し方で、某の名を呼ぶ。

…何か様子が変だ…。それに、狭は某の事を“様”づけで呼ばないはずだし…

「…!！」

一つの可能性が頭に浮かんだ某は、驚きの余り後ずさりをする。

「お主…まさか…?」

某は恐る恐る、村雨丸の柄に触れていた利き腕を外しながら、狭に近づいていく。

「信乃様…。私です…大塚村の浜路…はまじです…!」

「…!！」

まさか、誠に…!!

狭の口からこの台詞が紡ぎだされ、その瞬間…某は、彼女の肉体に何かを取り憑いている事を悟る。しかも、それが、己の亡き許嫁・浜路だという事を——すると、信乃の心臓の鼓動が少しずつ早くなっていく。

「信乃様…!！」

狭子の“中”にいる浜路がそう叫んだ直後、某に向かって走り寄ってきた。

浜路……！！！！

この時、一瞬、狭の顔が浜路と重なる。そして、己の胸に飛び込んできた彼女を強く抱きしめた。“身体は違えど、この感覚はまさに浜路である”——それを己の身で体感する信乃。

「私……ずっと……信乃様にお会いしようございました……！」

某の胸の中で、浜路が涙を流す。

それを見た途端、今まで抑えていた気持ちがあふれ出してきた某は、狭の背中に腕を回して、ギュツと強く抱きしめていた。

このまま、時間^{とき}が止まってしまえばいいのに……

肉体は狭子だが、浜路を抱きしめている感覚に陥っていた某は、すっかりそのような事を考えていた。しかし、今にして思えば……この行為がどれだけ狭子を侮辱し、苦しめていた事が——
それについては、今でも後悔している。

「ぐっ……！！！！」

この出来事が収まった後——普段は無愛想で感情を表に出さない現八が突然、某の頬を殴った。

その勢いで、地面に転げ落ちる信乃。

「何をする……！！？」

何故殴られたのかが解らず、鋭い視線で某は現八を睨みつける。

その隣の部屋では、浜路に取り憑かれたせいで疲れて倒れた狭子が眠りについていた。

「……ふん。死んだ女の事を、いつまでも引きずりおって……！」

「何……！！？」

逆上しようとした某を見た現八は、ため息交じりで再び口を開く。

「まあ、お主がどこの女を想うのは勝手やもしれぬが……」

「……？」

その直後、周囲の空気が変わったような感覚に陥る。

「お主は先ほどの出来事で、狹が取りつかねながらも、意識があった可能性を考えなかったのか!!!」

「えっ…!?!」

その台詞を聞いた途端、某は身体を硬直させる。

「それに…お主の態度がどれだけ狹につらき想いをさせているか…朴念仁たるお主には、解せぬであろうな!!!」

「…」

まるで某を殺さんと言わんばかりの形相で、現八は怒鳴りつける。

これだけ必死の彼を見たのも初めてだったが…何より、浜路の事を想い、落ち込んでいる自分と、そんな己に側にいてくれた狹の事を思うと――己が情けなく感じるようになる。

「…確かに、現八の申す通りやもしれぬな…」
「…」
「やっと、自分が殴られた理由を悟る。」

“申し訳ない”という気持ちがいっぱいになった某は、すぐさま眠りにについている狹の元へと歩き出したのであった――

このような出来事があつた後、下野国へ入つた某達は、返璧の里たまがえしで6人目の犬士・犬村大角いぬむらだいかくまさのりと出逢う事となる。最初、庚申山で化け猫と対峙した某達はその後、大角の父・赤岩一角殿の亡霊から化け猫が一角殿に成りすまして、大角…この時は角太郎と名乗っていた彼や彼の妻・雛衣殿ひなきぬにひどくあたりちらしている事を知る。

「どんなに…どんなに…無念であつた事が…!!!」
父親の骨を握りしめながら呟く大角の瞳には、大粒の涙が流れていた。

狭や雛衣殿の活躍もあつて、某達は一角殿に化けた化け猫を退治する事に成功する。しかし、これによって永遠に父を失う事となつた大角は、悲しみの余り、地べたに座つて嘆いていた。その光景は…

幼き頃、母・手束^{たづか}を失った時の己にそっくりであった。

「うう……」

周りを気にせずに泣き続ける大角を見た狹は、自分の事のように涙を流し…現八も、少しづらそうな表情で見下ろしていた。

「角太郎殿には、俺たち兄弟がついている…。これが、その証じゃ

…」

静かな口調で語る信乃は、大角に「礼」の文字が浮き出た水晶玉を渡す。

その直後、自身の懷から「孝」の字が出る玉を取り出して、彼に見せた。

このような悲しき別れ等がありながらも、某達の犬士探しの旅は続く

その後、狹子が持つ能力・千里眼（「遠くの物や、本来なら見えぬ物も見える能力」）によつて武蔵国へ向かった莊助達の現状を把握したり、道中で九尾の神狐・政木狐との出会いもありながら、某達は、武蔵国・穂北で一度再会を果たす事となる。

狹の持つ千里眼にも驚きだが、彼女に対する謎は深まるばかりだ。

そもそも、巫女の家系でもなしにそのような能力を持つはずもないし、道節を探す時に見せた蒼き光など…彼女に対しては、解せぬ事が多い。また、各々の情報を共有する中、蒼血鬼（「血を食らう鬼の事」）・墓田権頭素藤^{ひきたごんのかみもとくはじ}や足利公や関東管領の裏で暗躍する妖しき尼僧^{みようちん}・妙椿らの名も耳にする事となる。

そんな中、穂北へ向かう途中ではぐれた7人目の犬士・犬坂毛野胤^{いぬさかけのたね}智^{とも}を迎えるため、鈴茂林^{すずのもり}へ向かう事となる。向かったのは某・莊助・小文吾・現八・大角・道節と狹を含めた7人。犬士も毛野を含めてあと2人という所までうまく事が進んでいた。

しかし、その鈴茂林^{すずのもり}にて、新たな戦いと思わぬ危機が待ち受けていた。

「はっ！！！！」

「ふんっ・・・！！！」

林中は一つの戦場と化していた。

叢に隠れて、毛野と彼の父上を手につけたという籠山逸東太縁連がこみやまいつとうたよりつら一騎打ちを繰り広げる中、某達には、幕田素藤に仕える蒼血鬼・牙が静せいと、妙椿の刺客と思われる黒ずくめの者達の襲撃に遭う。

素藤から狭子を連れてくる命を受けていた牙静という男は、すぐさま彼女を捕らえようとするが、某が間に入る事で戦いの火ぶたが切られる。この漆黒の着物をまとった敵は、刀を使わずに戦う丸腰状態だが、鬼であるせいか、某の一撃も見事に防御してくる。

「妙椿と手を組んだり、狭を狙ったり・・・。お主達の真の狙いはなんなのだ！！？」

「残念ながら・・・その真意は素藤様しか存じません」

某の猛攻にも、平然とした表情かおで対応する牙静。

その後も戦いが続き、両者一步も譲れない状況となっていた時だった。

「やめてええっ・・・！！！！」

「！！！」

突然、少し離れた場所から狭子の叫び声が聴こえる。

「ぐあっ・・・！！」

それに反応した某は、その一瞬の隙を突かれ、腹部に強い衝撃が走る。

同時に、その勢いで近くにあつた木まで蹴り飛ばられ、激突する。

「くっ・・・」

地面に座り込んでしまった某を見下ろす牙静。

とどめを刺されるかと思いきや、彼の視線は別の方へと向いていた。
「ふ・・・。こんな時に、背中がから空きとは・・・。初めて相まみえた時と同じで、隙だらけの娘ですね・・・」

「！！！！？」

そんなことを呟いていた牙静は、不気味な笑みを浮かべていた。

「ま……て……！」

その直後、敵は狭のいる方へゆっくりと歩き出す。

立ち上がって追いかけようとしたが……先ほどの攻撃で頭をぶつけたせいか、立ちくらみを起こして、思うように身体が動かせない。腹部が痛く、今にも気絶しそうな某だった。

「信乃さん……！」

「莊助……」

その数分後、意識が少しだけ飛んでいた某は、莊助に名を呼ばれて我に返る。

身体がふらふらしながら顔をあげてみると――

妙椿の刺客を退治した現八らの前に、牙静が立っていた。

しかも、奴の腕の中には……締め上げるようにして捕えられた狭の姿が。

「ああ……あつ……！」

彼女は某の状態に気が付き、敵の腕から逃れようと試みたようだが、逆に腹を締め付けられる事で、尚更逃れられない状況に陥ってしまった。

「狭っ……！！！！」

その苦しそうな表情を見た途端、焦りと憤りを感じた某は、思わず彼女の名を叫ぶ。

意識が朦朧とする中、敵は狭が持つという“三世の姿”の話や、此度の件が妙椿の命令でもある事などを語る。そして、某達の元を去ろうとした時――連れて行かれる事を理解した狭は、必死にこちらに向けて腕を伸ばそうとする。

「信乃……！！皆……！！」

某の瞳に、泣き叫ぶ狭子の顔が映る。

「狭っ……！！！！」

彼女の元へ行こうと必死に腕を伸ばそうとするが――

敵は

狭子と共に姿を消してしまった。

「くそっ…！」

莊助の肩を借りて立ち上がった某は、絶望と自責の念に包まれていた。

「守る」と決めたのに…なんというザマだ…！！

悔しさの余り、拳を強く握りしめる。

「…おい…」

気が付くと、我ら犬士達の前に、籠山逸東太を倒した毛野が現れる。頬に返り血をつけた彼の手には、狭が持っていたお守り刀と、牡丹花の紋が刻まれた鞘が握りしめられていた。

「貴様らが隠れていたのは薄々勘付いていたが…。今は兎に角、あの女子が連れ去られた所以を説明してもらおうか…！」

そう話す彼の表情は、かなり深刻そうだった。

後で本人から聞く事となるが…どうやら彼は、狭のおかげで命を救われた。そして、親の仇討を成せたらしい。しかし、それもあって逸東太が連れていた牙静に隙を突かれて捕まってしまったため、「自分にも責任がある」と感じて必死のようであった。

しかし、敵の真意がわからぬ某達は、そんな彼の疑問に答えられず黙り込んでしまう。

「若」

「…！曳手^{ひくて}か…」

我らが黙り込んでから、いくらか時間が経過した後――

――道節の近くに、彼や音音殿^{おとね}に仕える忍び・曳手^{ひくて}殿が姿を現す。

彼女の登場は、微妙な空気になっていた某にとっては、一種の救いであつた。

「…如何した？」

「…“さるお方”からの命にて…若や皆様をお迎えに上がりました」

「“さるお方”…？」

その遠回しな言い方に、首をかしげる大角。

そんな彼に気が付いた曳手^{ひくで}さんは、眉一つ変えずに口を開く。

「…それは、安房国を治める殿・里見義実様でございます」

「！！！？」

「突然の呼び出し、応じてくれて大義である」

「ははーっ」

その後、曳手^{ひくで}殿と共に、某達一行は、行徳へ向かった。

小文吾が営む宿・古那屋にて、義実公との初対面と、大法師様^{ちゅだいほうし}との再会を果たす。

挨拶が済んだ後、法師殿の口から里見家が窮地に立たされているという現状などの説明があつたが…話はすぐに、狭子への話題へと移る。また、行徳に着くまでの間、毛野には莊助や現八の口から、何故鈴茂林にいたのか等の経緯を説明していた。

「何…？狭殿が連れ去られただと…！？」

「はい…」

某の口から、狭が攫われた事を聞いた法師殿は、目を丸くして驚いていた。

しかし、妙だったのは、その後ろにいた義実公も、ひどく驚いていた事である。それから、莊助や大角が事の経緯を彼らに口頭で伝えた。また、義実公が毛野に直接声をかけて、狭が所持していたお守り刀を見せたりした後――法師殿の口から、

衝撃的な事実を知らされる。

「貴方がたが今日まで旅をし、“狭殿”と呼んでいたお方こそ…鷹に攫われて行方不明となっていた、里見の五の姫・浜路^{はまじ}姫様なのです…！！」

「なっ…！！？」

法師様の台詞に、某達犬士は、驚きの余り言葉を失ってしまう。

「狭子が…里見の姫…！！？」

某は、とても信じられないような表情で、その言葉を口にする。

しかし、その台詞とは裏腹に…今まで狭に対して腑に落ちない事が、
全部一つにまとまった
んな感覚も覚えた信乃であつた。

そ

第2話 深まる謎と降りかかる危機（後書き）

いかがでしたでしょうか。

今回、『蒼き牡丹』の狭子視線では描ききれなかった部分を存分に書けた気がして、大満足しています♪
なので、内容も密度が濃かったかも…

さて、第1章である信乃編は、3話構成でいくつもりでしたが…このままうまくまとまるのだろうか？という、不安もあり（汗）
でも、構想がゾクゾク浮かんでいるので、頑張ってまとめていこうかと思っています！

ご意見・ご感想等がありましたら、宜しく願います（^^

第3話 守るための戦い

「狭子が里見家の姫である」という驚愕の真実を、犬士達わんしは法師殿の口から知らされる。初めは言葉を失っていたが、これまで腑に落ちなかった出来事が一つに繋がり、ある意味納得のいく話であった。

蒼き光を放つのも…おそらく、我ら犬士を生み出した伏姫様と同じ血を受け継ぐがゆえなのであろうな…

この時、そんな事を考えていたが…今はとにかく、この苦境を乗り越えなければならぬ。

「…ここにおりましたか、信乃殿」

「大角…」

とある晩、行徳付近ゆきつけを流れる利根川の付近で考え事をしていると、古那屋のある方角から大角が現れる。

連れ去られた狭を救うべく、まずは道節に仕えるくの一・単節ひとよを偵察に向かわせた。居所を探るのが一番の目的であり、一方で蒼血鬼・墓田権頭素藤むきたこののかみもとふじらの妨害がないかを確かめる意もあつた。

単節殿からの朗報を待つ一方…某と莊助は、道節の口から狭子と彼女が所持していたお守り刀の話を聞いていた。これは、その夜の出来事である。

「…眠れませぬか？」

「ああ…。大角もか…？」

「ええ…まあ…」

某と大角は、空を見上げながら、そのような事を口にしていた。そして一呼吸程置いた後、大角がこちらを向いて口を開く。

「信乃殿、一つ…確かめたい事がございます」

「確かめたい…こと…？」

彼の思わぬ台詞に、某は首をかしげる。

「貴方と…そして、狭…浜路姫様の事です」

「！」

狭子の名が出た途端、某の表情が少し強張る。

そんな己を横目で見つめながら、大角の話は続く。

「…貴方は、彼女の事をどのように思いか？」

「…？」

何を訊くのかと思えば…予想だにしない問いであった。

「…」

某はほんの僅かな間だけ、黙り込んで考える。

「共に旅してきた同志…仲間といった所か」

「…本当にそれだけですか？」

「え…！？」

この時、大角の顔からいつもの穏やかな笑みが消えていた事に気が付く。

そして、彼から食い入るような眼で見つめられながら、時は過ぎていく。

「あの娘は、亡き許嫁と顔立ちがそっくりだが…とても芯の強き女子で…」

独り言のように呟く某の頭の中には、明るい笑顔を見せる狭。泣き叫んでいる所等——喜怒哀楽を示す彼女の姿が浮かんでいた。

『ありがとう…』

そして、最後に浮かんだのは…一筋の涙を流しながら笑顔を見せる、暖かい微笑みであった。

心の臓が強く脈打っており…。しかも、その脈も速くなりつつある…。これは…

「狭…」

彼女の名を口にした時、某は何かを悟ったかのように空を見上げた。
「…わたしが何を申したかったのか…。諭していただけたかと思えます」

空を見上げる某を横目に、大角は穏やかな表情で語る。

彼に問われ、はつきりと悟った己の気持ち。同志や仲間としてだけではない、莊助のように義兄弟としての感情にもあらず……。前向きであり、明朗快活……。そして、純粋な精神こころを持つ彼女を、恋い慕っていた事を――

「……大角」

「……何でしょう？」

己の元から去ろうとしていた大角を、呼び止める信乃。

大角の方に向きなおした某は、まるで宣言するかのように口を開く。

「某は、狭の事を好いておる。……故に、何があるうともあの娘を魔の手から救い出したい……！！これは、彼女が里見の姫ゆえとか……そのような事は関係なしに……じゃ……！！」

そう言い放つ某の瞳には、強い焰のような眼差しを宿していた。

そんな己を見つめて黙り込む大角。すると、普段の穏やかな笑みに戻り、閉じていた口を開く。

「それを聞いて安心致しました……」

「大角……？」

「おそらく、この先……我々には更なる危機が訪れるかも知れぬ。しかし、貴方のように、恋い慕う者……「守りたい」と思う者がいれば、人は何倍も強くなれる……という事です」

そう告げた後、彼は古那屋の方へと戻っていった。

大角……まことに、かたじけない……！

某は、大角のおかげで狭への気持ちを自覚する事ができた。これまで、許嫁だった大塚村の浜路の事が、やはり忘れる事ができなかった。しかし、狭が敵に攫われ、その身が危ない事。そして、先ほどの会話によって、某の心は決まったのであった――

「犬士達はおるか……！！？」

その翌々日、古那屋にいる犬士達われわれの元に、政木狐まさきつねが現れる。

「政木狐…。そんなに声やかましくせんでも、聞こえておるわ」
あまりの大声に、ため息交じりで呟く現八。

しかし、そんな彼の台詞を完全に無視していた狐は、某の存在に気が付くと、すぐさま近寄ってくる。

「んな事より、朗報や！！浜路姫の居所がわかったんや！！」

「本当か！？」

それを聞いた途端、その場にいる全員の表情が変わった。

「しかし、政木狐よ。そなた…大江親兵衛とやらと共に、京へ向かっていたのでは…？」

狭の居所がわかったのは喜ばしいが、某はこの狐が何故この場にいろのが不思議でたまらなかった。

「ああ…。実はな…」

ドカカッ ドカカッ

その後、行徳を出た犬士達は、とある場所へ向けて馬を走らせる。

行徳を出立する前

政木狐が行徳にたどり着く

までの経緯を語ってくれた。

彼の話だと、京から安房国へ戻る途中、妙椿ら敵方の動向を探っていた単節殿と偶然会いまみえる。そこから親兵衛の案により、政木狐を行徳におる我々の所に向かわせ、親兵衛と単節殿に敵の元へ乗り込む事となったという内容である。

政木狐の話だと、単節殿は手負いだったという…。鬼の血を引くならば、傷の治りも早いと思っていたが…

某達は、道節から「鬼の忍びは我々よりも強靱な肉体を持つ」と聞いてはいたが、何故か妙な胸騒ぎを感じていた。

しかし、その妙な胸騒ぎは、嫌な意味で的中してしまう。

「単節さん…」

眠るように息を引き取った単節殿を見下ろしながら、涙を流す狭子。行く途中で通りかかった海岸で、妙椿の刺客に襲われている彼女達

を見つけた某達。莊助達にはすぐに彼らの加勢に向かつてもらい、某はその場にいなかった狭を必死で探した。

「狭っ！……！」

ついに見つけ出した時、狭は暮田素藤と共にいた。

「信乃っ……！！！」

そう己の名を呼ぶ彼女は、素藤に抱きすくめられ、その腕から容易に逃れられない状況に陥っていたと思われる。

特に怪我をしていないようなのでそこは安心したが――

己の頬に狭の頬を近づけ、見せつけるかのように抱きしめる敵の表情を見た途端、無意識の内に怒りを感じていた。

その後、狭子を奪い返すために、某は素藤との死闘を繰り広げる。完全な勝利はできなかったが、何とか狭を取り返す事に成功した。

この時は、再会できた喜びでそれ所ではなかったが――

――今にして思うと、狭が身を挺して素藤を止めようとした際、彼女にとつて素藤は単なる“敵”ではなくなっていたのかもしれない。妙椿の刺客を退けた後、鬼の弱点たる蒼血鬼の血が塗られた武器で致命傷を負った単節殿は、双子の姉・曳手殿ひくての腕の中で息を引き取る。“忍びは人にあらず”

“死ぬ時は独り”という掟のある彼女達に涙を流していた狭をとても愛おしく感じた某は、黙ったまま彼女を抱きしめる。

身近な者であろうがなかるうが……尊い命が失われる事は、誠に悲しい……。そして、多くの命が犠牲となる“戦”……。守るべき者のためとはいえ、早くこのような悲しい出来事がなくなるよう努めなくては……

某は声を押し殺して泣く狭を抱きしめながら、これから待ち受けているであろう大戦おおいけんへの心を強く固めるのであった。

「それでは、各々……明日より、各地へ展開してもらいたい！」

「御意……！」

狭を助け出した後、我ら犬士の一行は安房国・里美家の本陣がある
滝田城を訪れた。

兼ねてより里美家の棟梁・里美義実公さとみよしざねから家臣として認められた某
達は、戦での防衛使を勤める事と相成った。その戦の相手は、あしかがのしげつじ許我
の足利成氏公や関東管領・扇谷定正を要とする連合軍。

道節からの報せによると、この戦を起こすために画策していたのが
…妙椿と名乗る尼僧と、白髪の鬼・幕田素藤だという。しかも妙椿
とは、里美家に滅ぼされた領主・山下定兼の妻であつた玉梓なる者
が怨霊として現世うつよに現れた存在だという。

因果が巡る…とは、まさにこの事を申すのであろうな…

某は、己が防衛使を勤める事となつた国府台こうのたいへ向かいながら、その
ような事を考えていた。

そして、戦いの火蓋が切られ、この地に赴いた某・現八・親兵衛ら
は戦いに身を投じていく。狭の奪還を通じて、8人目の犬士である
事が発覚した犬江親兵衛仁いぬえしんへえまさし。年は13か14程と年若い…京で見
せたという活躍や、最初に彼女の奪還を成功させた童なだけあり、
同じ犬士としてとても頼もしかった。

「けが人を癒すため」として行軍に加わってくれた狭のためにも
…必ず、この地を死守してみせる…!!

馬にまたがった某は村雨丸を駆使して、襲い掛かる敵を次々となぎ
倒す。戦場は、村雨丸からほとばしる水柱が、この戦場を舞う。現
八や犬兵衛も足軽隊として彼らの前を先導し、確実な一撃と素早い
動きで敵を翻弄していく。

「あれは…!!?」

しかし、優勢かと思われていた最初の戦も、敵方の新兵器によつて
苦戦を強いられる事となる。

後に狭からその兵器の名を教えてもらう事となる。彼女の話だと、
その新兵器は駢馬三連車へいはさんれんしゃといい、大陸にある国の戦車を真似て作つ
た戦車だという。大八車みたいなものを3つ連ね、前と後ろにそれ

ぞれ鉄砲と弓矢を持った6人の兵がそこに乗り、御者は左右に2人と騎馬が6頭。馬にもそれぞれ、薄鉄の鎧が着けてあるという代物。戦のさ中、我ら里美軍は「それ」を目の当たりにするのである。

「犬塚殿！！わが兵は馬兵と足軽隊で組まれております！！このままでは、圧倒的に不利です……！！」

兵の一人が某に進言する。

「っ……！！」

周囲を見渡すと、駢馬三連車を前にもろくも崩れる自軍の光景が目に入ってくる。

確かにこのままの進軍は、絶対的に不利……。しかし、敵に背中を見せれば、追い討ちに遭って全滅する可能性も……

兵達にどのような命を下せばよいかと困惑する信乃。しかし、時は一刻と過ぎ、本当に撤退をせねばいけない状況に段々陥っていく。

「信乃……！！」

「現八……！？」

すると、全身が傷だらけの現八が某の元に現れる。

「わしが殿を勤める……！！その間に……早く兵を退かせるんだ……！！」

「……！！」

その台詞を聞いた途端、目を丸くして驚く。

しかし、戦況が不利なため、某の心も揺らいでいた。

「早くしろ……！！このまま全滅させる気か……！！？」

鬼気迫った現八の表情を見た途端、考える暇などない事を悟る。

「まもなく夜が更ける……！！一時、撤退せよ……！！」

某の合図と共に、里美軍は撤退を開始する。

現八……死ぬなよ……！！！！

殿を務めてくれた現八が無事に戻る事を願いながら、某や親兵衛の軍は撤退を始める。国府台での戦い初日は、里見軍に多大な被害を与えて終える事となった。

その後、文明^{ふいめ}の岡に陣を移す事となる里見軍。絶体絶命の危機に陥っていたが…狭の元に里見家一の姫であり、我ら八犬士の産みの親である伏姫の神霊が現れる。彼女が狭をこの時代に誘った張本人である事を悟り、実の姉姫にあたるという事実は、不思議な心地がした。

また、伏姫様は、劣勢のわれ等に「火猪^{かちよ}の計」という策を授けてくれた事により、戦況が一変。里見軍による逆転劇が始まるのである。そして、勝利への光明が見えてきた矢先————狭子の元に魔の手が伸びていたのである。

第3話 守るための戦い（後書き）

いかがでしたか。

今回は恋愛模様もあれば、戦場面もありで、まとめるのが大変でした。

…そして、やはり3話分ではまとまりきれませんでした（TOT）
信乃は本編でだと準主人公的な立ち位置にいたので、彼視線で描くと、いろいろ載せられる事が多い・・・。

とまあ、こんなかんじですが、とりあえず随想録1の信乃編はもう少し続きます。

ご意見・ご感想があれば宜しく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9061x/>

犬鬼人随想録 ～ 蒼き牡丹外伝 ～

2011年11月5日18時47分発行